

< 目次 >

1. 事務局より
2. 編集委員会より
3. 前事務局より
4. 前年度編集責任より
5. 新編集委員より
6. 本年度編集責任より
7. 運営・企画担当より
8. 例会予定
9. 談話会予定
10. 各地の研究会だより
11. 海外情報
12. メーリングリスト Frenchling からのお知らせ
13. 2018年度収支決算報告
14. 編集後記

1. 事務局より

今年度から事務局が名古屋外国語大学へ移転いたしました。事務局業務は伊藤と近藤で分担して行います。連絡先は次のとおりです。

〒470-0197 愛知県日進市岩崎町竹ノ山 57
名古屋外国語大学世界共生学部 近藤野里研究室内
日本フランス語学会事務局
belf-bureau_gg@nufs.ac.jp

◆会費

会費の徴収は郵便振替で行っています。『フランス語学会研究』に同封する振込用紙をご使用ください。3年以上会費の納入が滞っている場合は会員資格が停止され、『フランス語学研究』は送付されなくなりますので、ご注意ください。最新号の『フランス語学研究』第53号は2016年度以降に会費を納入された方にお送りしております。

◆投稿規程の変更

従来『フランス語学研究』への投稿は11月末日ま

でに原稿を事務局宛に郵送することとなっていました。第51号から事務局にメールで投稿するように変更されました。今年11月末締切の第54号につきましても、郵送や編集委員による持ち込みは受けつけられませんのでご注意ください。詳細につきましては第51号以降に記載されている投稿規程をご参照ください。

◆機関誌バックナンバーのアーカイブ化について

2018年4月現在、創刊号から49号までがJ-STAGEで公開されました。

J-STAGE <https://www.jstage.jst.go.jp/>

フランス語学研究巻号一覧

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/belf/list/-char/ja>

今後も、刊行後3年を経過した号から順次、J-STAGEにて無料公開してまいりますので、会員の皆様におかれましては、バックナンバーとしてご活用いただけましたら幸いです。

(伊藤達也・近藤野里)

2. 編集委員会より

編集委員会より以下の4つのお知らせがあります。

◆年間テーマについて

日本フランス語学会では、昨年度のテーマ「フランス語の多様性」に引き続き、「フランス語の対照・比較研究」を2019年度の年間テーマとします。学会誌においてもこのテーマで特集を組みます。詳しくは下の募集のお知らせをご参照ください。

◆『フランス語学研究』第54号特集論文募集：
テーマ「フランス語の対照・比較研究」

『フランス語学研究』第54号(2020年6月刊行予定)では、年間テーマ「フランス語の対照・比較研究」の特集論文を募集します。優れた論文が投稿されることを期待しています。原稿提出締切は2019年11月末

日必着で、投稿方法は従来通りですが、投稿の際に「表紙ファイル」で「形式」を「特集論文」としてご下さい。なお、それ以外のテーマの論文も従来通り募集していますので、こちらも奮ってご投稿ください。

◆『フランス語学研究』投稿規程改訂のお知らせ

編集委員会では、協議の結果、投稿規程を一部改訂しました。執筆者の母語以外の言語で書く場合、「原稿提出前に信頼できる母語話者によるネイティブ・チェックを受けること」という文言が新たに加わりました。また、共著の扱いについて、第1条と第9条に括弧書きで加筆を行いました。過去10年ほど投稿がない研究ノートについても、執筆条件を容易にし、投稿を促進するために、制限枚数を7枚から10枚に増やし、その内容を第3条に反映させました。詳しくは、『フランス語学研究』表紙裏の「投稿規程」及び巻末の「投稿原稿のジャンルについて」をご覧ください。

◆日本フランス語学会会則改訂について

事務局を名古屋外国語大学に移転するにあたり、郵便局での振替口座の移行手続きに不足していた情報を指摘されたため、不足情報を補う形で現行の日本フランス語学会会則を2019年5月5日付けで変更いたしました。変更点は以下の通りです。(1) 学会設立日(第1条):「本会の設立は1967年6月4日とする。」、(2) 所在地(第3条):「c. 本会の所在地は事務局の所在地とする。」、(3) 臨時会議開催(第5条):「本会は問題が発生した場合は臨時会議を開催して審議を行い、その議事は出席者の過半数の同意をもって決定する。」

なお(1)について補足します。『フランス語学研究』第1号(1967)の「あとがき」に「…朝倉季雄氏その他数名を発起人として、…青山学院大学で行なわれた昭和42年度日本フランス語フランス文学会春季大会を機会に学会の一分野の研究を推進するために「フランス語学研究会」を創立する…」とあり、この大会の開催年月日を設立年月日に相当すると判断しました。日本フランス語フランス文学会の学会誌『フランス語フランス文学研究』12巻(1968)の「Chronique Mars 1967 - Novembre 1967」によると、「Congrès de printemps à Tokyo, organisé par l'Université Aoyama. Dimanche 4 juin」, つまり1967年6月4日とあります。これを

日本フランス語学会の創設日としました。

(日本フランス語学会編集委員会)

3. 前事務局より

2015年4月から2019年3月まで、早稲田大学の酒井さんの研究室に事務局所在地を置きながら、前半2年は早稲田大学と東洋大学で、そして後半2年は早稲田大学と京都大学で分担する形で事務局の業務を行ってきました。通常業務は所在地となっている酒井さんに負うところが大きかったのですが、個人的には、学会誌の公開先をCiNiiからJ-Stageへ移行するために必要だった膨大な作業を何とか終えることができ、ほっとしております。

この4年の間、会員名簿を把握してきた立場として、会員数の減少(つまり会費収入の減少)も目立つようになってきましたし、「複数の編集委員を擁する大学が事務局を担当する」という慣例を守ることますます難しくなってきたように思います。新事務局では幸いにもこの慣例に戻ることができましたが、名古屋外国語大学にお願いできるのは3年間であり、さらにその次を考えておく必要があります。そのとき、我々のとった態勢は、2つまたはそれ以上の大学で業務を分担することも可能だという前例になったのではないかと思います。特に後半2年は、きちんと仕事を分担して連絡を取り合えば、近隣の大学でなくても十分に分担可能であることを示せたように思います。今後の学会運営の新しい可能性として受け止めて頂ければ望外の幸せです。

当初、運営委員でもある2人が事務局まで担当することに「権力の集中」を懸念する声もあった中での出発でした。我々としてもそのことは十分に認識しており、慎重に業務にあたってきたつもりではありますが、この態勢が会員みなさまにご迷惑をおかけしたり、何かしらの疑念を抱かせたりといった結果になっていないことを、今はただ祈っております。

(守田貴弘)

4. 前年度編集責任より

前任の金子真さんに並走していただきながら、1968年から刊行されている雑誌のリレーをなんとかつないだというのが正直な感想です。雑誌のフォーマットは

完成されており、編集委員の中で、たまたま私が誌面作りという作業を取りまとめる形で、編集委員の皆様、執筆者の皆様に大いに助けられました。編集会議でも毎年同じように進んでいると思われながらも、変化が刻まれた年ともなつたと思います。「たゆたえども沈まず」の諺通りに、困難を乗り越えながら、本誌の母体であるフランス語学会が未長く活動を続けていけるよう、今年度からは事務局の担当として後方支援に勤んでいきたいと思ひます。例会やシンポジウムなどには皆勤したものの、原稿の投稿の呼びかけなどが、思ったほど出来なかつたことは今年の反省点です。その点が、特集論文が少なかつた所以でしょうか。例会などの学術的な場に加えて、より研究者間で気楽に話せる場を設けられればというのが今後の課題とも考えます。これは事務局としての課題となるでしょうか。来年度は奥田智樹さんに編集責任のバトンを渡します。

(伊藤達也)

5. 新編集委員より

◆プロ・パティスト (東京外国語大学)

今年度より編集委員としてどうぞよろしくお願ひ致します。「世界を変えたければ、あなた自身が世界に望むような『変化』とならなければならぬ(マハトマ・ガンジー)」ーグローバル社会において、このガンジーの言葉の意味と重要性は益々増しているように思われます。私は2010年から2017年にかけて筑波大学大学院にて日仏語対照研究についての修士論文と博士論文を執筆することを通じて、日本語とフランス語の相互理解に関して、このような一つの「変化」の可能性を投げかけることを試みてきました。具体的には、この二つの言語を根本的に異なるものとして隔ててきた言語学的な重要テーマの一つである、「単数形と複数形」という問題系について、新しい理解の可能性を示すことが私の研究の目的です。私のこれまでの研究の主な結論として述べたいのは、以下の二点です。第一点目として、日仏語における名詞複数形の選択は言及対象の捉え方の認知科学的な問題である、という点が指摘できます。第二点目としては、複数形のメカニズムは、一般的に考えられるような名詞の範囲だけではなく、名詞に加えて、冠詞と述語動詞の振る舞いをも含んだより広い叙述の範囲の中で成立している、と考えられ

るのです。私の博士論文では、フランス語のケースに焦点を当てることで、数の再定義の可能性を示すことを試みましたが、単複の対立がない日本語の名詞複数形についても検討し、日仏語対照研究を行うことによって、日本語の名詞複数形の場合も同様の認知科学的なメカニズムが観察できるかを今後の課題としたいと思ひます。今後ともよろしくお願ひいたします。

◆岸本聖子 (愛知県立大学)

今年度より編集委員に加えていただくことになりました。私は学部生時代にフランス語学に出会い、意味論や語用論に惹かれて大学院に進学しました。にもかかわらず、大学院では興味が定まらず、国内でも留学先でも社会言語学や談話分析や言語教育などの授業ばかりとるなど色々と寄り道回り道をし、最終的には人間の世界の捉え方と言葉との関係性への興味という形でブーメランのように原点に戻ってきました。この数年間の出来事が良くも悪くも色々な面で影響しましたが、しばらくは認知言語学の観点からモダリティ表現の周辺的な事例について研究を進め、博士論文としてまとめました。その過程で、フランス語学会には例会への参加や発表という形でお世話になりましたが、院生時代は関西在住ということもあり、例会への参加は限られたものでした。大学で働くようになってからはより頻繁に参加させていただくようになりました。参加するたびに、様々な角度からの深い議論に刺激を受け、また勉強させていただき、それを研究のモチベーションとしていたのですが、今回、このように編集委員として関わる機会をいただき、とても嬉しく思ひます。2016年後期より現在の職場ですが、愛知県立大学にはフランス語圏専攻があり、毎年1学年の半数程度の学生がフランス語圏の国・地域に留学します。協定大学にはケベックやベルギーの大学が含まれていますが、そういった国・地域でのフランス語の特徴に関心を寄せる学生が少なくなく、私自身が言葉と社会との関係に改めて刺激を受けています。修士時代に回り道をしたことが、はからずも小さな道しるべとなつてくれています。それとリンクするかのようには、現在は、言語景観の観点から観察できるフランス語表現と日本語表現の特徴について、語用論的、また社会言語学的観点からの比較を試みています。どうぞよろしくお願ひいたします。

6. 本年度編集責任より

今年度の編集責任を仰せつかった名古屋大学の奥田と申します。折しも事務局が早稲田大学から名古屋大 国語大学に移転した最初の年度に、この大任を拝命することとなりました。現在、日本フランス語学会はまさに変化の過渡期にあり、今年度は例会のスケジュールや開催場所、『フランス語学研究』の編集の仕方など、様々な事項に関する改革に一定の目途をつけなければなりません。何分にも諸事不慣れなため、皆様にはご迷惑をおかけすることも多々あるかと存じますが、一生懸命頑張りますので、皆様のご理解とご支援をたまわりますよう、よろしくお願い申し上げます。

(奥田智樹)

7. 運営・企画担当より

2018 年度 12 月例会(第 325 回例会)が流会となったことを frenchling の例会案内で知った非学会員が私に次のように言いました。「発表者が見つからなかったんですね。」その場は適当に笑ってやり過ごしましたが、内心「いままで運営担当として一度たりとも発表者を見つけようとしたことはないんだけどな」と思いました。運営の仕事は、発表枠を用意して待ち、先着順でそれらの枠を埋めていくという機械的なものです。人望や洞察力があるに越したことはないかもしれませんが、なくても運営担当は務まります。(先着順で)発表する権利はすべての会員に等しく開かれています。そのことは過去のニューズレターでも強調してきました。それにもかかわらず使用されない枠があれば、それがその時点での会員のニーズということになります。

10 年あまり運営を担当してきて、特にここ数年は会員数に対して発表枠が多すぎると感じていました。過去 5 年、年間 14 の例会発表枠がすべて埋まった年度は一度もありません。「発表したくてもできない(審査で不採択になる)人が続出する」のが平均的な学会のあり方だとすれば、「審査がないのに発表枠が埋まらない」というのが正常なあり方でないことは明らかです。

あまりはっきり言うと叱られるかもしれませんが、一度くらい流会になった方が、発表枠が多すぎることが誰の目にも明らかになって好都合だとすら思っていました。そして、ついに 2018 年度 12 月例会で流会が現実のものとなりました。2018 年度は、発表枠 14 に

対して発表者 7 で、ちょうど半分の枠が使用されずに終わりました。

こうした経緯をふまえ、今後 5 年のシミュレーションを行った結果、2019 年度は例会開催を 4 月、6 月、9 月、12 月の 4 回とし、発表枠を年間 8 とすることを決定しました。この 8 すら埋まらないことが、この原稿を書いている時点(2019 年 4 月)ですでに確定しています。現行の「東京で年 4 回の例会開催(発表枠 8)」があるべき最終形態であるとは思われません。「東京(ばかり)でよいのか」、「年 4 回は多すぎないか」、「発表枠 8 は多すぎないか」という問題意識をもち、今後も会員のニーズに即した例会のあり方を模索していきたいと思います。

(酒井智宏)

8. 例会予定

2019 年度例会は 4 月、6 月、9 月、12 月の 4 回開催されます。例会案内はホームページによる他、メーリングリスト **Frenchling** でも配信しています。例会はフランス語学会の会員以外の方でも、自由に来聴することができます。入場も無料です。みなさまのご参加をお待ちしております。

会場：早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス)

アクセス：

地下鉄東京メトロ 東西線 早稲田駅 徒歩 3 分

副都心線 西早稲田駅 徒歩 12 分

JR 山手線/西武新宿線 高田馬場駅 徒歩 20 分

発表のご希望やその他例会に関するお問い合わせ：

日本フランス語学会例会運営担当

[reikai\(a\)list.waseda.jp](mailto:reikai(a)list.waseda.jp)

※ (a)を@に置き換えてください。

以下はニューズレター編集段階の 4 月 30 日現在の予定です。最新の予定は学会ホームページで確認してください。

第 326 回例会 2019 年 4 月 20 日(土) 15:00-18:00

会場：早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス) 33 号館 16 階第 10 会議室

(1) 渡邊 淳也 (東京大学)

「フランス語大過去形の特徴的用法について」

司会：小田 涼 (関西学院大学)

第 327 回例会 2019 年 6 月 15 日(土) 15:00-18:00

会場：早稲田大学文学学術院 (戸山キャンパス) 33 号館 16 階第 10 会議室

(1) 宮脇 玲奈 (関西学院大学研究生)

「テキスト構造の観点からみる大過去形についての一考察」

(2) 小川 彩子 (関西学院大学研究生)

「<Moi+擬似関係節>型構文と脱従属化」

司会：フランス・ドルヌ (青山学院大学)

第 328 回例会 2019 年 9 月 28 日(土) 15:00-18:00

会場：早稲田大学文学学術院 (戸山キャンパス) 33 号館 16 階第 10 会議室

(1) 田代 雅幸 (アテネ・フランセ講師)

「対立の連結辞の共起関係について」

(2) プョ・バティスト (東京外国語大学) 「フランス

語における名詞複数形の意味」

司会：須藤 佳子 (日本大学)

第 329 回例会 2019 年 12 月 7 日(土) 15:00-18:00

会場：早稲田大学文学学術院 (戸山キャンパス)

(1) Loïc Renoud (岡山大学)

「Principe de l'ultime forme—un mot est toujours le dernier prononcé, lu, entendu...—conséquences pour une sémantique éactive du verbe prédiqué」

(発表はフランス語の予定です)

(2) 発表者未定

司会：金子 真 (青山学院大学)

9. 談話会予定

以下の通り、フランス語談話会を開催致します。皆さま奮ってご参加ください。

日時：11 月 9 日 (土) 未定

場所：未定 (追って Frenchling で連絡いたします)

テーマ：「進化の観点から日本語話者とフランス語話者のコミュニケーションの違いを考える (仮)」

パネリスト：

香田啓貴 (京都大学霊長類研究所)

狩野文浩 (京都大学高等研究院熊本サンクチュアリ)

守田貴弘 (京都大学大学院人間・環境学研究科)

世話役：田原いずみ・秋廣尚恵

(秋廣尚恵)

10. 各地の研究会だより

◆関西フランス語研究会

関西の大学院生と教員が中心になって研究会を開いています。会場は原則的には関西大学です。昨年は 2 回の開催で、発表件数は 3 件でした。皆さんの積極的な参加を待っています。

7 月 21 日：

佐々木香理「接頭辞 RE の本質的機能 - RE と à / de nouveau の比較対照 -」

3 月 16 日：

谷口永里子「従属節中の主語名詞句の倒置における焦点化について」

Loïc RENOUD 「Perspective éactive sur les temps verbaux : questions théoriques et applications en Français Langue Étrangère」

この研究会では、論文や学会発表をひかえる人がその準備のために発表したり、論文を完成したり学会発表を終えた人がその内容を紹介したりしています。形式にこだわらず、気軽に意見・情報の交換ができる集まりです。また、新刊書や論文の紹介、国内外の新しい研究の動向についての紹介や解説なども歓迎します。

発表を希望される方は世話人の平塚か大久保までご連絡ください。案内はメーリングリスト Frenchling で行っています。

平塚徹：hiratuka@cc.kyoto-su.ac.jp

大久保朝憲：tomonori@ipcku.kansai-u.ac.jp

(平塚徹)

◆東京フランス語学研究会

東京フランス語学研究会は、大学院生など、若手を

中心としたフランス語学研究者の気楽な研究発表，議論，交流の場です。日本フランス語学会と直接の関係はありませんが，多くのかたがたに参会していただきやすいよう，2018年度までは，フランス語学会の例会がひらかれる日に，同じ会場で開催してきました。

2019年度より，フランス語学会の例会が年4回実施に減少したため，4月，6月，9月はフランス語学会の例会のまえに（2018年度までと同様に）実施することとし，11月には単独実施とします

会員資格，発表資格，会費などの制度は設けませんので，関心のあるかたはどなたでも自由に参会，発表していただけます。発表は，フランス語（学）に関係することであれば，どのようなテーマでもかまいません。また，完成された内容である必要もありません。学会発表の前段階にあたるような習作的な発表や，先行研究に対する論評といった形の発表も歓迎します。

4月末現在，今後の研究会の予定は，つぎのようになっております。

第43回研究会

日時： 2019年4月20日（土）13:00-14:30
会場： 早稲田大学文学学術院（戸山キャンパス）
33号館16階第10会議室
発表者：井上大輔（上智大学大学院）
題目： 「思考動詞の否定文における叙法選択」

第44回研究会

日時： 2019年6月15日（土）13:00-14:30
会場： 早稲田大学文学学術院（戸山キャンパス）
33号館16階第10会議室
発表者：未定

第45回研究会

日時： 2019年9月28日（土）13:00-14:30
会場： 早稲田大学文学学術院（戸山キャンパス）
33号館16階第10会議室
発表者：山口奈美（西南学院大学大学院）
題目： 未定

第46回研究会

日時： 2019年11月16日（土）14:00-17:00

会場： 早稲田大学文学学術院（戸山キャンパス）33号館16階第10会議室

発表者：未定

発表を希望なさるかたは，下記ホームページの「お問い合わせ」の項目から世話人あてにご連絡ください。最新の予定については，ホームページの「今年度の研究会」の項目でご確認ください。

東京フランス語学研究会ホームページ：

<http://lftky.jimdo.com/>

（渡邊淳也・塩田明子）

11. 海外情報

今号は海外研修制度を活用してパリに滞在された山本大地さんの経験談をご紹介します。

◆ソルボンヌ＝ヌーヴェル大学（パリ第3大学）

（Université Sorbonne Nouvelle - Paris 3）

勤務校の海外研修制度を利用して，2017年の8月から1年間フランスに滞在することができました。受け入れ機関は，フランスのパリにあるソルボンヌ＝ヌーヴェル・パリ第3大学です。以前から興味の対象が近いと勝手ながら感じていた，**Florence Lefevre** 氏に受け入れを依頼しました。面識がまったくなかったので，お返事をいただけるかどうか不安でしたが，履歴書と研究計画書とともにメールを差し出してから，わずか3時間後に承諾の旨を返信してくださいました。以前の留学で指導教員を見つけるのに苦労した私にとって，これは本当にありがたいことでした。

ソルボンヌ・ヌーヴェル大学の言語学の教員，大学院生は，**CLESTHIA** という大きな研究ユニットに所属しており，その中で小規模なテーマごとの研究グループ（他大学の研究者も参加）に分かれております。大学のウェブサイトを見ると，いくつものグループがあるようですが，私が研究会に参加できたのは，**Français contemporain vernaculaire**（規範化されたフランス語でなく，自然かつ無頓着に発されるフランス語の研究），と **Grammaire et genres de discours brefs**（掲示物，広告，注意書きなどにみられる簡潔な文形式の研究）の2つです。なお後者には，当学会員で編集委員も務めておられる **France Dhorne** 氏が加

わっておられ、2017年3月には青山学院大学で、*Le genre bref, son discours sa grammaire, son énonciation* と題したコロックがひらかれております（本誌 52 号 pp. 133-135 をご参照ください）。私のフランス滞在中に、ソルボンヌ・ヌーヴェル大学で *Grammaire et genres de discours brefs* の研究会が何度か行われ、私自身、『タンタンの大冒険』における非動詞文をテーマにした発表をする機会をいただきました。同日、街中や駅構内にある看板や注意書きに関する修士課程の大学院生数人による共同発表もあり、自分たちで撮った写真をコーパス化していく手法が語られ、大変興味深いものでした。

上記とは別に、2つのコロックで発表する機会を得られましたので、これらについても簡単にご紹介します。1つは2017年9月7日から9日にかけて、パリ・ソルボンヌ大学でひらかれた *Adjectivité* で、形容詞に限らず、様々な語の形容詞らしさ、形容詞的な働きを問うものでした（詳細は本誌 52 号 pp. 139-140 をご参照ください）。フランスに到着して2週間後に開かれる日程でしたが、この発表のおかげで、遊びたい誘惑に負けることなく、着いたその日から研究生活をスタートすることができました。もう1つは、2018年3月15日16日に、ソルボンヌ・ヌーヴェル大学で行われた *Dia du français actuel* で、フランス語のさまざまな側面（文体、年代、地域など）のヴァリエーションをテーマにしたものでした。こちらはすでに3回目のコロックで、第1回目の成果が *Sciences pour la communication* の第116巻に公表されております。フランスでは、日本フランス語学会、日本言語学会のように、恒常的に学会誌を刊行し続けている団体が存在せず、散発的に何らかのテーマに沿ったコロックがひらかれ、その成果を既存の雑誌や叢書で公表するという形がとられることが多いように思いました。基本的にフランス国立図書館に毎日通い、発表準備と論文執筆に明け暮れていました。地味ではありましたが、授業も事務仕事もなく、1日の時間をすべて自分の思うままに過ごすことができた日々は、本当に、本当に充実した日々でした。フランス滞在中も終盤に差し掛かった2018年7月、街中ではワールドカップで大盛り上がりを見せていたときでも、図書館では多くの人が勉学に励んでいた…と思ったら、実はパソコンで試合観

戦をしていた人がかなりいたことも良き思い出です。

（山本大地）

12. メーリングリスト Frenchling からのお知らせ

Frenchling はフランス語学関係の情報交換を目的としたメーリングリストです。1996年3月の立ち上げ以来、20年以上の長きにわたって大阪大学言語文化研究科のフランス語関係の教員有志が運営に当たってきましたが、2017年6月に日本フランス語学会の公式メーリングリストとなりました。これまでどおり、フランス語学関係の研究会や講演会といった催事の告知、文献の探索、あるいはフランス語そのものについての質問、疑問、そして議論に活用して頂くほか、フランス語学会の公式行事の案内なども配信されるようになりました。公式メーリングリスト化に伴い、これまでもまして、特定の政治的メッセージを含むもの、営利的な活動、アルバイト募集等の研究・教育と関係のないアナウンスなどはくれぐれもご遠慮いただけますようお願いいたします。なお、フランス語関係の教員の募集に関する情報は流していただいて全く問題ありません。設立当初はフランス語に関する議論がこのメーリングリストで盛んに行われたものですが、最近はそのようなことも少なくなったのが残念です。フランス語の研究や教育に従事している我々は、フランス語に関して日々新しい発見や疑問を持つことも多いかと思いますが、そのような発見や疑問を共有するためにもこのメーリングリストを利用していただければと思います。

Frenchling は Google グループサービスを利用して運営しています。新規の登録、アドレス変更、あるいは退会の場合は直接、以下の管理グループアドレスまでご連絡ください。メンバー以外の方に登録を勧められる場合も、同じアドレスをお伝えください。

Frenchling 管理グループアドレス：

g-frenchlingowners@googlegroups.com

日本フランス語学会の公式メーリングリストとなりました **Frenchling**、ますますご活用いただければ幸いです。

（Frenchling 担当委員）

13. 2018年度収支決算報告(*)

(単位 円)

収入の部

会費	686,000
機関誌売上金	117,000
広告収入	78,000
預金利息	822
学会経費補助 (早稲田大学)	50,000
小計	931,822
前年度繰越金	2,960,631
計	3,892,453

支出の部

BELF52号印刷代金(本冊および別冊)	565,239
BELF53号編集実費	180,000
ニューズレター印刷代金	18,252
発送費・通信費	55,635
特別発表(講演)謝金	202,700
会場費	25,952
事務消耗品費	6,534
振込手数料	19,022
ホームページ管理費	5,466
言語系学会連合会費	10,000
小計	1,088,800
次年度繰越金	2,803,653
計	3,892,453

次年度繰越金の内訳は以下のとおり。

銀行預金 (三井住友銀行普通預金)	702,332
(三井住友銀行定期預金)	2,008,253
郵便貯金 (普通)	38,884
(振替)	16,896
現金	37,288
計	2,803,653

(*) 2019年3月31日現在の収支決算報告。5月に開催される編集委員会で会計報告と監査報告がなされ、審議のうえ承認の手続きがとられる。

〒162-8644

東京都新宿区戸山1-24-1
早稲田大学文学学術院 酒井智宏研究室内
日本フランス語学会

14. 編集後記

博士課程に入って1,2年くらい経った頃だろうか、フランスでは2000年に入ってから紀要のような学内の機関誌等の論文は評価しない、国際的な業績を出せと言われるようになっていた。フランスのジャーナルで「FURUKAWA NAOYO」という名前を見つけて、日本でもそうなのだろうかと思ったことを覚えている。当時、あまり日本人の名前を見かけなかったので印象に残っているが、女性だと思っていた。自分の研究テーマと異なるので、あまり気にかけてはなかったが、それが古川先生だと知ったのは日本でフランス語学の軽井沢合宿に参加するようになってからだ。実家が自転車で10分ほどの同郷で、同じ高校の出身だとも知った。

国際政治学で論じられているように、権威主義傾向の政権が台頭し、専制政治が世界を席卷している。それにともない、人びとは迎合的な姿勢を取らざるをえず、内容のない形式主義や不毛な椅子取りゲームが始まる。昨今の学術業界でも似たようなことを感じることもある。ブラジルでは研究の内容が制限されつつあると現地の研究者から聞いた。フランスでは、少なくとも「椅子」の取り合うための哀しき数の業績主義だそう。かつては独創的で新たな視点で研究することを求められ、高名な研究者たちはそのロールモデルばかりだった。現象に対する真摯なまなざし、学術的に適切なアプローチ、論述の妙、新たな概念の創出。そのような姿勢をたたき込まれ、そしてそれを追い求めていた仲間にもまれていたような気がする。

古川先生は退任後も研究を続けられ、毎夏軽井沢で、フランス語で書かれた論文の投稿前ドラフトを配布して、研究成果をお話くださった。ドラフトといっても、ほぼ完成された国際論文である。お話し聞く度に、かつての研究者のように1つのロールモデルを示そうとされていたのではないかと感じたことを思い出す。ご冥福をお祈りいたします。

本年度号も無事終わることができました。末筆ながら、原稿をお寄せくださった方々ならびに関係者のみなさまにこの場を借りてお礼を申し上げます。

(木田 剛)

♪ ニューズレターのバックナンバーは、日本フランス語学会のホームページで読むことができます。

<http://www.sjlf.org/>

